

【2】東諸県郡小体連（学校数 5校 児童数 1322名）

I 年間事業

日 程	事 業 内 容
令和4年5月24日	第1回 東諸県郡小学校体育連盟役員会 (1) 役員選出 (2) 令和3年度決算報告 (3) 令和4年度事業計画・予算案検討 (4) 令和4年度の研究計画・研究内容について
令和4年6月21日	第2回 東諸県郡小学校体育連盟役員会 (1) 県小体連第1回理事会・専門部会報告 (2) 各校水泳記録会実施計画案の検討 (3) 研究内容に基づく理論研究
令和4年8月3日	第3回 東諸県郡小学校体育連盟役員会 (1) 各校水泳記録会反省 (2) 各校陸上記録会開催要綱について (3) 研究内容に基づく理論研究
令和4年10月4日	第4回 東諸県郡小学校体育連盟役員会 (1) 各校陸上記録会実施計画案の検討 (2) 研究内容に基づく理論研究
令和4年12月9日	第5回 東諸県郡小学校体育連盟役員会 (1) 各校陸上記録会反省 (2) 研究内容に基づく実践研究
令和5年2月3日	第6回 東諸県郡小学校体育連盟役員会 (1) 研究のまとめ (2) 次年度の計画

II 事業部のあゆみ

1 水泳記録会（7月実施）

- (1) 参加児童 東諸県郡内各小学校5、6年生
- (2) 実施種目 自由形(25m、50m) 平泳ぎ(25m、50m) 100mリレー
- (3) 反省

感染症防止、熱中症防止、働き方改革の観点等から、今年度も各学校での記録会となった。一堂に会しての記録会は行わなかったが、児童の記録をとることで、目標をもって練習に取り組むことができた。次年度以降についても、今年度同様の実施を予定している。

2 陸上記録会（11月実施）

- (1) 参加児童 東諸県郡内各小学校6年生
- (2) 実施種目 50mハードル走 ソフトボール投げ
- (3) 反省

感染症予防の観点等から、今年度も各学校での記録会となった。他種目の実施も検討したが、運動場の広さや用具等の関係から難しかった。50mハードル走において、身長が低い児童は練習をしてもなかなか跳ぶことができず、怪我をする児童もいたようだ。今後、選抜選手のみの実施や50mハードル走が厳しい場合は他種目で記録をとることも視野に入れる必要がある。また、6年生は行事が多い時期であり、学校によっては練習時間が十分取れないまま実施していたようだ。そのため、再度、実施時期の検討も必要である。

III 研究部のあゆみ

1 研究主題・副題

生涯にわたって心身の健康を保持増進し、
豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育む体育科学習
～ 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図った実践を通して ～

2 主題設定の理由

学校体育の究極の目標は、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成することである。その達成には「令和の日本型学校教育」で述べられている「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現が必須であり、そのための授業改善が急務である。本研究では、授業改善の方向性として、副題に掲げる個別最適な学びと協働的な学びについて、個別最適な学びの成果が協働的な学びに生かされ、さらにその成果が個別最適な学びに生かされるといった学習成果の往還が実現されるように、両者が一体となって充実するような実践を通して、研究主題の達成をねらいとするものである。

3 「主体的・対話的で深い学び」と個別最適な学びと協働的な学びの関係性

「主体的・対話的で深い学び」は学校教育で育成すべき資質や能力を子どもに身に付けさせるための授業改善の視点であるが、個別最適な学び及び協働的な学びは、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた学習活動の充実の方向性の視点である。以下の表は、国立教育政策研究所プロジェクト研究「学校における教育課程編成の実証的な研究」の一環として作成された検討メモをもとに、東諸県郡小体連が主体的・対話的で深い学びと個別最適な学び及び協働的な学びとの関係性を考察したものである。

	授業改善に向けた「学習者」の視点	「個別最適な学び」及び「協働的な学び」	授業改善に向けた「授業者」の視点
主体的な学び	<ul style="list-style-type: none"> ・学ぶことに興味や関心をもつ。 ・自己のキャリア形成の方向性と関連付ける。 ・見通しをもつ。 ・粘り強く取り組む。 ・自己の学習活動を振り返って、次につなげる。 	<p>個別最適な学び</p> <p>○ 指導の個別化</p> <p>一定の目標をすべての子どもが達成することを目指し、個々の子どもに応じて異なる方法等で学習を進めること</p> <p>子ども自身が自分の特徴や自分はどうのように学習を進めることが効果的であるかを学んでいくこと</p> <p>○ 学習の個性化</p> <p>個々の子どもの興味・関心等に応じた異なる目標に向けて、学習を深め、広げていくこと</p> <p>子ども自身が到達したい目標を選んだり、どのような方向性で学習を進めていったらよいかを考えたりしていくこと</p> <p>○ 協働的な学び</p> <p>子ども一人一人が自分のよさや可能性を生かしながら、友達との意見交流や議論を経て、自分の考えを広げ深めたり、自分やグループの問題を解決したりすること</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・既習事項を振り返る。 ・具体物を提示して引き付ける。 ・やってみたくなる学習課題を設定する。 ・子どもが自らめあてをつかむようにする。 ・課題解決に向けて見通しをもたせる。 ・ICT機器を活用して、自分の考えを発表しやすくさせる。 ・子どもの思考の流れに即して授業展開を考える。 ・子どもの考えを生かしてまとめる。 ・その日の学びを振り返る。 ・新たな学びに目を向けさせる。
対話的な学び	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども同士の協働を通じ、自己の考えを広げ深める。 ・教職員や地域の人との対話を通じ、自己の考えを広げ深める。 ・先哲の考え方を手掛かりに考える。 		<ul style="list-style-type: none"> ・友達同士で意見を交流させる。 ・他者の意見に対する自分の考えをもたせる視点を提示する。 ・ICT機器を活用して、多くの意見を可視化する。 ・上手に交流できているモデルを示す。 ・交流を通じて、自分の意見を広げ深めさせる。 ・協働しなければ解決しないような問題を提示する。 ・協働して問題を解決させる。 ・板書や発問で教師が子どもの学びを引き出す。
深い学び	<ul style="list-style-type: none"> ・各教科の特質に応じた「見方・考え方」を働かせる。 ・知識を相互に関連付けてより深く理解する。 ・情報を精査して考えを形成する。 ・問題を見出して解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう。 		<ul style="list-style-type: none"> ・授業で身に付けさせたい資質・能力を焦点化する。 ・ねらいを達成した子どもの姿を具体化する。 ・事実的で個別な知識を概念的で構造的な知識に変換できるような発展問題を提示する。 ・知識や技能を関連付けさせるような発問をする。 ・ICT機器を活用して、目標の達成状況の情報を多角的に収集・評価する。

この表からも分かるように、主体的・対話的で深い学びを実現するためには、個別最適な学びと協働的な学びの視点に立って、授業改善していくことが必要である。

4 学習モデルの構築

本研究は初年度なので、運動領域を器械運動（マット運動）に絞って研究を進めることにした。まず、個別最適な学びと協働的な学びの効果を往還させるための基本的な学習モデルを構築した。

【器械運動の学習モデル】

学習モデルを構築するにあたって、次のようなことを考慮した。

- 器械運動の機能的特性に触れさせる。
- 個別最適な学びと協働的な学びの学習効果が往還していくような学習過程にする。
- 学習内容を精査する。
 - ・ 器械運動の行い方を理解すること
 - ・ 基本的な技を安定して行ったり、その発展技やさらなる発展技に取り組んだりして、技を身に付けようとする
 - ・ 個人やグループで、それらを繰り返したり組み合わせたりして技を身に付けるようにすること
- 運動技能を習得するための学びの過程を協働的な学びの中に意図的に組み込む。

過程	主な学習内容及び活動	指導上の留意点 (○) 及び解説 (☆)
導入	1 学習の準備 <ul style="list-style-type: none"> ・ 場作り ・ 準備運動及びストレッチ ・ 基礎感覚を高める運動 2 ねらい及びめあての確認 <ul style="list-style-type: none"> ・ 班でのねらい ・ 個人のめあて 	○ 単元の第1時（オリエンテーション）で、学習の場作りや準備運動、ストレッチについて指導しておく。 ☆ 学習は、班別で行われる。班での活動は方形マットでの集団演技⇄長マットでの個人の技の向上の2つの場を行き来して進められる。 ○ 前時のふりかえりの際に、次時の改善点が話し合われ、それが本時のねらいやめあてになる。（個別最適な学び）
展開	3 方形マットで集団演技の出来映えを高める。 <ul style="list-style-type: none"> ○ 集団演技の構成 ○ タイミングや移動距離の調整 ○ 動きのコツの発見・共有化 ○ ICT機器を用いた客観視 ○ 他の班からのアドバイス 4 長マットでの個人技の出来映えを高める。 <ul style="list-style-type: none"> ○ できる技の安定化 ○ できそうな技への挑戦 ○ 動きのコツの発見・共有化 ○ ICT機器を用いた客観視 ○ 友達からのアドバイス ○ 学習資料の活用 	○ 班や個々の課題に気付かせるとともに、課題解決に向けた方法や練習方法を選択できるように提案・提供する。（個別最適な学び） ○ 班で演技の構成を考えたり演技の出来映えを高めたりする。 ☆ 集団演技と個人技を行き来することで、個別最適な学びの成果を協働的な学びに生かし、さらに協働的な学びで得られた成果を個別最適な学びに生かすことができる。（集団演技で○○の技がしたいから、長マットでできるように練習する。長マットでできるようになった○○の技を集団演技の中に取り入れる。） ○ 運動技能を習得する学びの過程を意識しながら、友達と協力して技の出来映えを高める。（協働的な学び） <ul style="list-style-type: none"> ・ タブレットで配信された技一覧から動きのポイントを知る。 ・ タブレットで技を録画してもらい、お手本動画と見比べる。 ・ 友達からアドバイスをもらう。 ・ 友達から聞いた動きのコツをやってみる。
終末	5 ふりかえり <ul style="list-style-type: none"> ・ 班でのふりかえり（協働的な学び） ・ 個人でのふりかえり（個別最適な学び） 6 まとめ	○ 各班でのふりかえりの視点を確認する。（ふりかえりの視点） <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の頑張り ・ 友達の頑張り ・ グループでうまくいったことと次時の課題 ☆ 本時のふりかえりが、次時のめあてになる。

4 授業の実際

器械運動の学習モデルを基に、実際に授業を行った。ここでは「Aくん」の学びに焦点を当てる。

(1) 個別最適な学び

① 学習の個性化

集団演技の構成を考える際、メンバーが今現在どんな技ができて、これからどのような技に挑戦していきたいかを班全体で把握したうえで、技の種類や回数、移動の向きなどを考えていく。

【Aくん】

前転、後転はできるが、側方倒立回転ができない。しかし、構成を考えた場合側方倒立回転をする人が必要となり、自分も側方倒立回転に挑戦してみたいと考えた。今までも何度か我流でやってみたが、なかなかうまくいかなかった。Aくんは、班全体の集団演技の出来映えを高めるためにも、自分が側方倒立回転を成功させることを目標とした。

② 指導の個別化

教師は、Aくんの側方倒立回転ができるようになりたいという思いを知り、いくつかの練習方法を紹介したり、動きのコツを発見するためのヒントを与えたりした。

【Aくんの練習】

Aくんは側方倒立回転ができるようになるために複数の学習法を選択した。

- 動画視聴・・・あらかじめ教師が配付した動画リンク集の中から側方倒立回転の動画を視聴した。

- 学習資料・・・壁に貼られた学習資料を見て、スモールステップで練習をしていく。
- 動画撮影・・・友達に自分の側方倒立回転を動画撮影してもらい、客観的に振り返る。
- 友達からのアドバイス・・・側方倒立回転を友達に見てもらい、アドバイスを受ける。

(2) 協働的な学び

A くんは側方倒立回転の練習や集団演技の出来映えを高めるために、班のメンバーが協働的に関わった。

① 動きを習得するコツの発見と練習

教師のヒントを手掛かりに、「側方倒立回転は、手のつき方と腰の高さが重要」という動きを見るポイントを発見した。そして、「手を順番に一直線について、頭の上に腰が来るようにする」という動きのコツを発見した。さらに、腰を高くするためには、川跳びやウサギの足うちが有効であることを調べ、練習した。また、練習の過程で側方倒立回転を動画に撮影し、お手本動画と見比べながらどこが違うかを検討しながら練習を重ねた。

② 集団演技を高める

方形マットでの集団演技を動画撮影し、終わってから自分たちの演技を客観的に見られるようにした。その際、2人同時に行う側方倒立回転のタイミングが合わないことが問題になった。動画を見ながらの検討や側方倒立回転をしないほかのメンバーからのアドバイスで、側方倒立回転の前に、1回ジャンプを入れることとなり、タイミングが合うようになった。

(3) 個別最適な学びと協働的な学びの学習効果が往還

実際の授業場面でも、個別練習の場である長マットで練習した側方倒立回転を、方形マットで行う集団演技に生かし、方形マットで見つかった新たな課題を長マットで解決し、さらにその成果を集団演技で生かすという、個別最適な学びの成果と協働的な学びの成果が往還していく様子が見て取れた。

また、側方倒立回転ができるようになるための学び方は、後転を苦手としていた C さんの学習にも生かされていた。具体的には後転が上手な B 君の動きやお手本動画を見て、後転の動きのコツが班全体で共有され、C さんはもとより、ほかのメンバーの後転も上手になっていった。

このように、器械運動の学習モデルを基にした授業を実践すれば、個別最適な学びと協働的な学びの実現、さらにそれらの学習成果の往還が図られることが分かった。

IV まとめ

今年度も、昨年度同様、水泳記録会・陸上記録会ともに各校開催となった。昨年度から継続して行うことができたのは成果である。しかし、他校との交流がないため、児童の向上心を図る上で課題となる面もある。今後の開催方法の工夫が必要である。また、十分に体力向上を図ることができなかったことも課題である。体育主任を中心に、体力向上プランの確実な実施をはじめ、体力の向上を図るための様々な取組を模索し、各校の職員に確実に周知及び実施を促していきたい。